

# 史跡 生目古墳群

—保存整備事業 発掘調査概要報告書IV—



2003

宮崎市教育委員会

## 序

国指定史跡生目古墳群は、平成10年度から保存整備のための調査を進めておりまます。これまでに3号墳前方部の見事な葺石、5号墳からは埴輪が出土し、5号墳・7号墳では良好な状態で周溝が確認される等、徐々に生目古墳群の姿がみえてきおりまます。

今回は、平成13年度実施しました第3次調査の概要であります。平成13年度は、5号墳、7号墳の調査を行い、特に7号墳からは祭祀行為が行われたと思われる遺構が確認され、多数の遺物も出土しました。

平成14年3月には、これまでの調査の結果を踏まえ初めての現地説明会を行いました。200人を超える多くの方が訪れ、その関心の高さに改めて驚かされました。地元生目地区の方のみならず、宮崎市内をはじめ県内、県外からも注目されており、今後の調査が宮崎の古墳時代の解明につながることを多くの方が期待されているものと、心を新たにしております。本報告書が古墳研究の一助となり、活用されますことを願っております。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご助言をいただきました諸先生方、発掘調査に従事された作業員の皆様に心より感謝申し上げます。

平成14年3月

宮崎市教育委員会

教育長 内藤泰夫

## 例　　言

1. 本書は更生保護施設改築に伴う、宮脇第2遺跡の報告書である。
2. 発掘調査は宮崎市教育委員会が平成14年9月17日から11月14日までの期間実施した。

### 3. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

文化振興課	課長	小掠　聖
調査総括	文化財係長	永井　淳生
調査事務	主任主事	今井　智美
調査担当	技師	宇田川美和
	嘱託	門田奈津子
整理担当	主任技師	稻岡　洋道
	技師	宇田川美和
	主事	仁尾　忠尊
	嘱託	門田奈津子
補助員	嘱託	椎　由美子 佐藤小夜子 緒方　吉嗣 遠田　容子

4. 本書の執筆は宇田川が行った。
5. 掲載図面の実測・製図・図版の作成は宇田川・仁尾・門田・椎・佐藤・緒方が分担して行った。
6. 現場での写真撮影は宇田川・門田が行った。遺物写真撮影は稻岡が行った。
7. 本書の編集は宇田川が行った。
8. 発掘調査により出土した遺物、及び調査に伴う図面・写真等は宮崎市教育委員会で保管している。
9. 本書において、特に記述のある場合を除き、遺構はS=1/60（但し、竈・埋甕はS=1/30）、遺物はS=1/3で掲載している。また図版中の [ ] は搅乱である。

# 第Ⅰ章 生目古墳群の概要

## 1. 調査に至る経緯

- 昭和 18 年 前方後円墳 7 基、円墳 36 基の計 43 基が国指定史跡を受ける。(9月 8 日)
- 昭和 36 ~ 38 年 上ノ迫土地改良事業により、一部の古墳が削平され、消滅及び形状が変化。
- 昭和 37 年 古墳標石、道標石、説明版の設置等の整備が行われる。
- 昭和 50、51 年 生目古墳群保存管理計画を策定、航空測量による地形図作成を行う。
- 昭和 57 年 古墳群約 14ha を対象とした境界点測量を実施。
- 平成 5 年 「宮崎市制 70 周年記念事業」の一環として(仮称)宮崎市総合スポーツ公園並びに生目史跡公園建設事業が取り上げられる。
- 平成 5 ~ 7 年度 国庫補助事業で、生目古墳群周辺遺跡発掘調査を実施。
- 平成 8 年 7 月 生目古墳群史跡公園整備委員会が発足、基本構想・基本計画策定にあたり、計 5 回の委員会を開催。
- 平成 9 年度 『生目古墳群史跡公園整備基本構想・基本計画報告書』作成。土地公有化開始。
- 平成 10 年度 国庫補助を受けて史跡整備に伴う発掘調査開始。

## 2. 古墳群の立地と現状

生目古墳群は大淀川下流右岸、宮崎市跡江地区に位置する東西約 1.2 km、南北約 1.2 km の長靴の形を呈した丘陵上に立地している。丘陵上は東側からは宮崎市街地が一望できる。丘陵の北西側は最高点 44.4m を測る急峻で複雑な地形を呈しており、古墳群の大半が立地する南東側は標高 25 ~ 30m の比較的平坦な地形を呈している。丘陵全城は照葉樹林地で、混ざってスギが植林される。事業開始前の古墳群内は畑地、ココスヤシの苗圃として利用されていた。

古墳群は現在跡江丘陵上に前方後円墳 7 基、円墳 20 基、丘陵下に 2 基の計 29 基の高塚古墳が所在する他、発掘調査等で確認された円墳 7 基、横穴墓 9 基、地下式横穴墓 14 基により構成される。丘陵上に造営された高塚古墳及び地下式横穴墓のうち、1、2、旧 2 ~ 4 号墳、地下式横穴墓の 6 基は、跡江丘陵北側に谷を挟んで対峙する独立丘陵に立地する。また横穴墓は、1 号墳前部南側側面に 5 基、3 号墳後円部西側の崖裾に 4 基構築されている。また、現古墳番号は 1 ~ 23 号(20 号は欠番)までの 22 基の古墳にのみ付してあり、指定時の番号とは異なる。

古墳群の史跡指定以前の資料としては、昭和 16 年に原田仁により 100 m 級の前方後円墳である 1・3・22 号墳の実測図が作成されており、また地元には戦前に作成された古墳案内略図(徳地一作図)が存在し、この絵図には台地上に前方後円墳 8 基、円墳 30 基が記されている。

昭和 49 年には、前年に破壊された 3 号墳後円部西側の 4 基の横穴墓の追跡調査が行われ、須恵器、土師器、貝釧、耳環、馬具類(轡、貝製雲珠)、鉄鎌、刀子等が出土した。

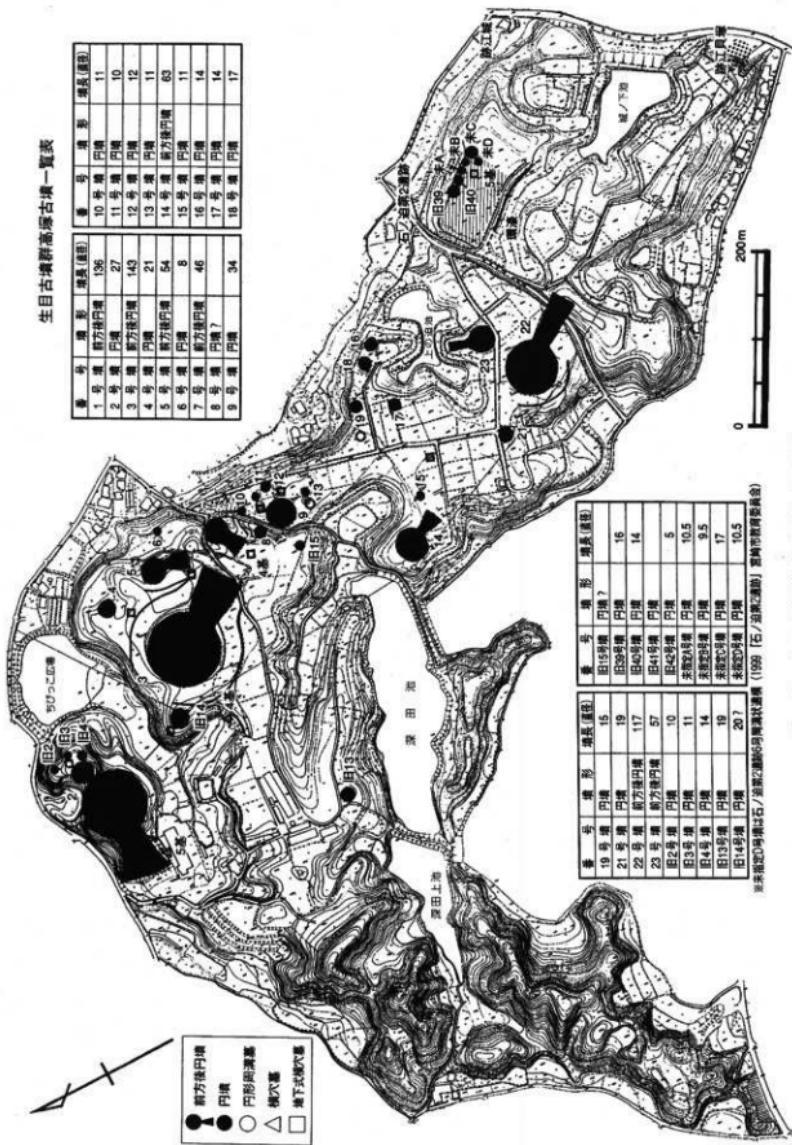
昭和 58 年には丘陵下の城平地区に所在する 41 号墳の確認調査を実施。調査の結果、径 5 m、高さ 1.5 m の円墳の周囲に幅 50 cm の周溝が巡ることが確認された。

平成 5 ~ 7 年の生目古墳群周辺遺跡発掘調査では、前方後円墳である 5・14・22 号墳周囲の調査で転落した葺石が検出され、22 号墳からは、壺形埴輪片が出土した。また、所在不明となっていた旧 2 ~ 4 号墳、旧 15 号墳周囲の調査を行い、その位置を確認した。その他、地下式横穴墓が 8 基、土坑墓が 6 基検出されている。この他、13 号墳南側、17 号墳西側から円形周溝墓が検出され、丘陵東南部の畑地では環濠集落の存在が確認された。



第1図 生目古墳群位置図 (1/100,000)

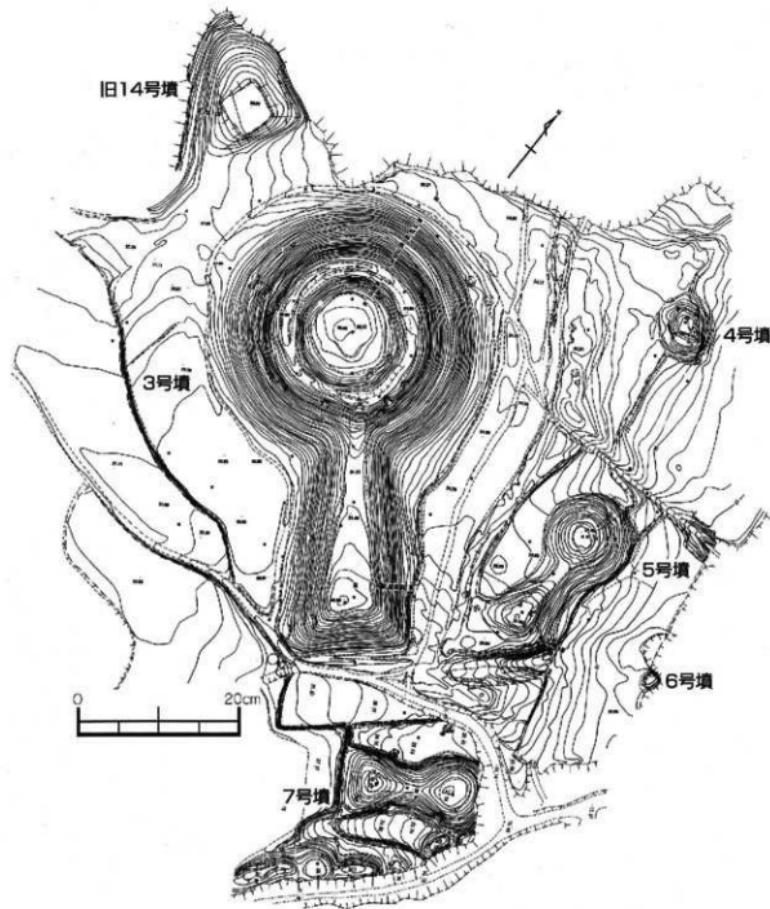
第2図 生目古墳群配置図(1/5,000)



平成8年には宮崎大学考古学研究室により3・5・7・14・22・23号墳の前方後円墳6基とその周辺の円墳の墳丘測量図が作成された。

平成9・10年には石ノ迫第2遺跡の調査が行われた。この調査は平成7年度に確認された環濠集落の環濠内側の居住域に該当する。弥生時代中期と後期後葉の集落が確認され、竪穴住居35軒等が検出され、集落廃絶後には土坑墓43基が構築される。所在不明となっていた国指定旧39・40号墳の周溝を確認した他、新たに中期から後期にかけての円墳4基が検出され、うち3基は地下式横穴墓を埋葬主体としていた。地下式横穴墓は計5基が検出されている。

平成10年からは整備に伴う発掘調査を開始。3～7、14号墳、旧14号墳の各所に調査区を設定した。



第3図 3号墳周辺図(1/1,500)

## 第Ⅱ章 5号墳の調査

### 1. これまでの調査の状況

3号墳前方部東側、丘陵東側縁辺部に位置する前方後円墳である。古墳の東側は開墾により削平され、特に前方部隅角は著しい。墳丘の北側から西側にかけては、幅8m程度の周溝が巡り、その外側には西側のみ周堤状の隆起が確認できる。

#### 【調査前墳丘規模】

墳長	54m	後円部径	29m
後円部高	4.4m	前方部幅	24m
前方部高	4.5m	前方部長	26m
くびれ部幅			12m



図版1 5号墳（南東より）

#### 【調査箇所】

- 後円部北東側約1/6(5 I a)
- 後円部南西側1/4から周堤(5 III)
- くびれ部東側(5C)
- 前方部東側側面(5 II a, 5 II b)
- 前方部西側側面(5 IV a)
- 前方部前面西側から周堤(5 IV b)

#### 【調査の結果】

墳丘は前方部、後円部共に2段築成で、下段以下に基壇を設ける。後円部のテラスは標高24.5m付近で巡ると考えられるが、残存が悪い。墳丘斜面には葺石が葺かれ、上段部分では比較的残存しており、5 IIIでは上段端部に直径20~30cmの円礫を横位に配する根石列がみられ、斜面に対し縦方向に区角列石も3箇所ほどで確認できる。下段でも葺石が確認できるが、後世の溝状遺構(幅1.1~2.3m)、土坑、攪乱により大きく削平され、明確な墳端も確認できない。

前方部の東側は上段裾付近から掘り込まれる後世の溝状遺構(スコリア混入黒色土)によって削平されており、テラス部分のほとんどと下段斜面を大きく削っている。斜面には上段、下段ともに丁寧な葺石が葺かれ、それぞれの端部では直径20cmの円礫を配した石列が一部で認められた。斜面の傾斜角は隅角側からくびれ部にいくに従い緩やかになる。基壇はくびれ部付近で明確に確認でき、盛土整形で基底部幅2.0m、下段裾から0.8m幅でテラス状になる。

前方部西側では上下段テラスは前面の一部で確認されたのみで、墳丘斜面は葺石が確認されたが、墳頂部から隅角に至る部分では残存していない。前方部西側側面では上段の葺石は比較的残存が良く、端部に根石と思われる直径20cm程の円礫を横位に配した石列が認められたが、その列石が隅角側から後円部側に向かって下る状況が見られた。下段は墳端部分を幅0.6m、深さ25cmを測る溝状遺構によって削平されているため、墳端を認めることは出来なかったが、上段と同様の状況になると考えられる。前方部西側側面の墳端では基壇は確認できない。前方部前面では葺石の残存が悪く、主軸ラインの一部で確認できたのみである。また、前方部前面では基壇が確認された。基底部幅0.7m、を測り、下段裾から僅かにテラスを持っている。基壇は西側隅角にいくに従い、隆起が少なくなる。隅角付近は墳丘の残存が悪く、明確な墳端を確認できなかったが、5号墳西側に控える周堤に接して隅角は認められると推測される。

周溝は墳丘西側で確認でき、隅角付近から前方部側面に平行に構築されるが、途中から外側に開く。底面は隅角側から後円部に向かって下っており、途中数箇所で傾斜変換が見られる。最大幅 12.0m を測る。前方部前面で周溝は確認されていない。

個体の確認できる遺物は墳丘東側に集中がみられ、墳丘西側ではくびれ部付近の周溝内から壺形土器が出土した程度である。埴輪のほとんどは前方部上段斜面から出土している。

これらの埴輪は独特で、透し孔を持たない、突帯が殆ど巡らないなどの特徴を持つが、前方後円墳集成編年 5 期に相当するものと考えられる。

5 号墳西側の周堤（3 号墳周堤）からは、5 世紀後葉以降の構築と考えられる土坑墓（15 号地下式横穴墓）が検出された。周堤の隆起を利用して構築され、3 号墳周溝側に羨道があり、5 号墳に向けて玄室を持ち、豊坑が見られない。玄室は周堤に平行する長方形プランに近い平入りを採用し、遺物は長頸瓶が出土している。

## 2. 平成 13 年度の調査結果

本年度は 4 箇所で調査区を設定した。

### 5 I (b・c)

後円部東側に設定した調査区で墳丘主軸に直行して北側を 5 I b、南側からくびれ部にかけてを 5 I c とした。結果、墳丘上下段を確認した。標高 24.0m 付近で上下段間のテラスがみられるが、残存が悪い。墳丘上段は葺石が良好な状態で残存するが、前方部平坦面から後円部にかけてのスロープになる部分では葺石は見られず、元より配してなかったと考えられる。また、くびれ部付近の斜面は前方部から延びてくる溝状造構によって切られる。下段は 5 I b の一部で墳端を確認し、直径 15～30cm の円礫を横位に配する根石列がみられるが、それ以外の部分では、斜面途中から、以下の基壇部分まで大きく削平されている。墳端は確認されていない。

遺物は埴輪片が上段斜面からテラスにかけて多数出土しており、下段部分では少なくなる。これらの遺物は頂部平坦面からの転落だと考えられる。

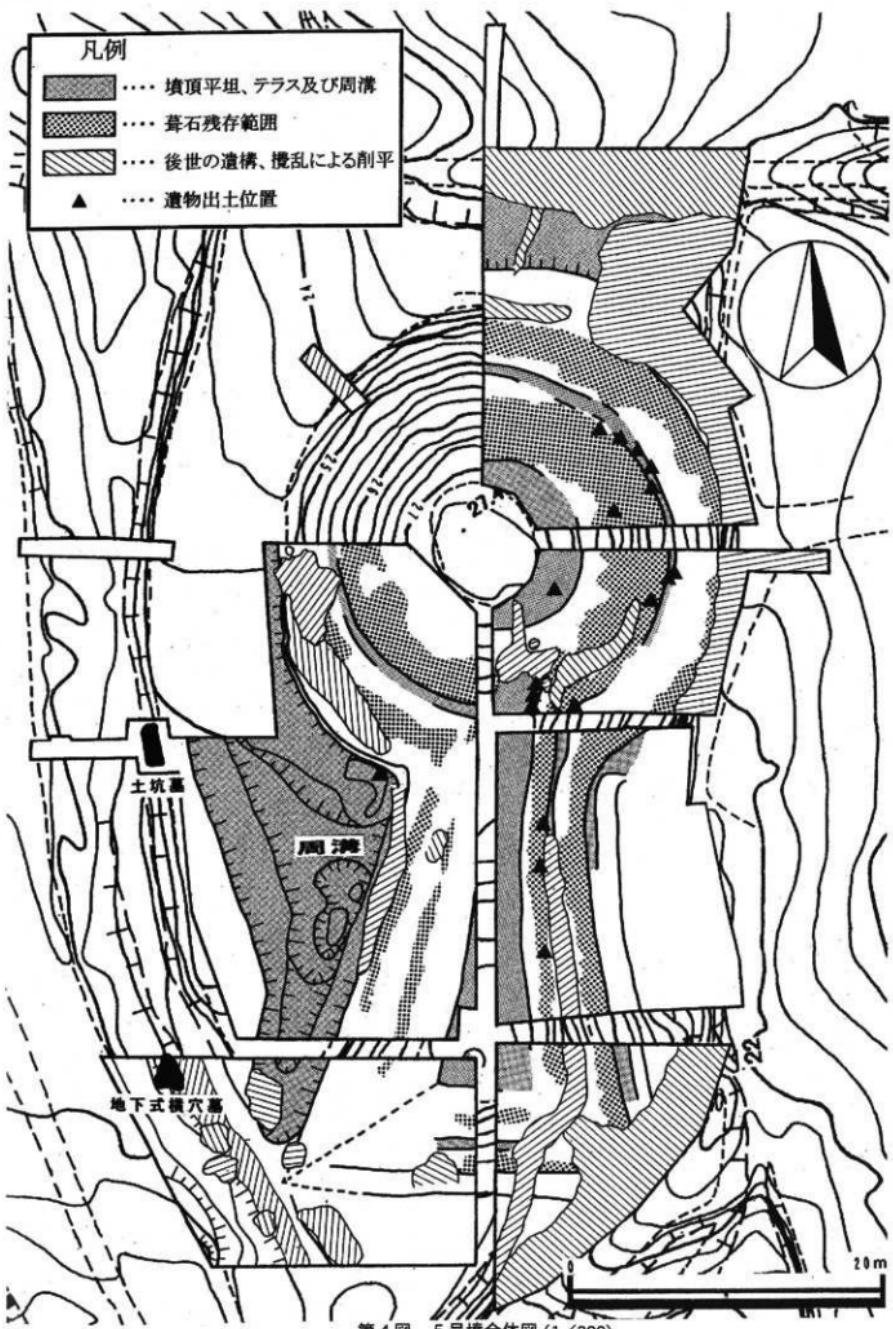
またくびれ部付近の前方部平坦面からは 0.8m の間隔で 3 個体の埴輪の底部が出土しており、ほぼ定位位置での出土であると考えられる。しかし、樹立のための掘り方は確認されなかった。

### 5 II c

前方部前面から、前方部東側側面にかけての調査区である。結果、墳丘上下段と以下の基壇を確認した。上下段とともに墳頂部から隅角に至る部分を除き葺石が残存しており、それぞれの墳端部分では直径 15～30cm の円礫を横位に配する根石列がみられる。下段以下の基壇は基底部幅 2.0m、高さ 0.5m を測り、幅 0.8m のテラスが見られる。本調査区においても墳丘を切る溝状造構が確認された。溝状造構は前方部前面付近で南北方向に走り、墳丘下段と基壇を大きく削り、その後墳丘の形状に沿うような状態で伸びており、前方部側面部分では墳丘下段斜面を削っている。前方部前面部分では幅 1.2m、深さ 90cm を測る。また墳丘端は南側を走る農道によって大きく削平されている。遺物は土師器の小片が墳丘斜面で数点出土した程度である。

### 5 IV c

前方部西側側面の墳丘から周溝全体を調査した。結果、墳丘部分では墳丘上下段の葺石が確認され、上段端部では直径 15～30cm の円礫を横位に配する根石列がみられる。下段墳端部分には墳丘に平行に幅 1.3m、深さ 40cm を測る溝状造構が走っており、墳端は確認されなかった。上下段間のテラスは確認されなかったものの、残存する上段の葺石帯が前方部からくびれ部に向かうに従い下っていっており、テラス本体もそういう状況であったと考えられる。



第4図 5号墳全体図 (1/300)

周溝は最大で幅12.0m、深さ70cmを測り、後凹部に向かって開いていく。遺物は墳丘と周溝内から土師器の小片が数点出土した程度である。

#### 出土遺物

5号墳の出土遺物は墳丘主軸を挟んで東側と西側ではその出土分布が異なっている。墳丘西側ではくびれ部付近の周溝内から壺形土器が2点(平成10年度調査分)出土している程度で、それ以外は小片である。個体の確認できるもの多くは東側で出土しており、このことから埴輪の樹立は東側のみであったと考えられ、丘陵東側に対する意識が窺える。また、これらの出土位置は墳丘上段斜面から上段断面集中が見られるため、樹立は墳頂平坦面のみと考えられるが、埴輪樹立痕は確認されていない。今回は前年度までに出土した資料も再度掲載した(1・5・10・12)。

#### 壺形土器

##### A種 単口縁壺(1) B種・複合口縁壺(2・3)

壺形土器は、底部の状態が確認できない。b類は頸部に突帯を有する。

#### 埴輪

##### A種 円筒形の体部を持ち、複合口縁状になるもの

a類・屈曲を持って口縁部が大きく開く(5~7)

b類・体部から屈曲を持たず口縁部が大きく開く(8~9)

##### B種 円筒形の体部を持ち、口縁が開かないもの(10)

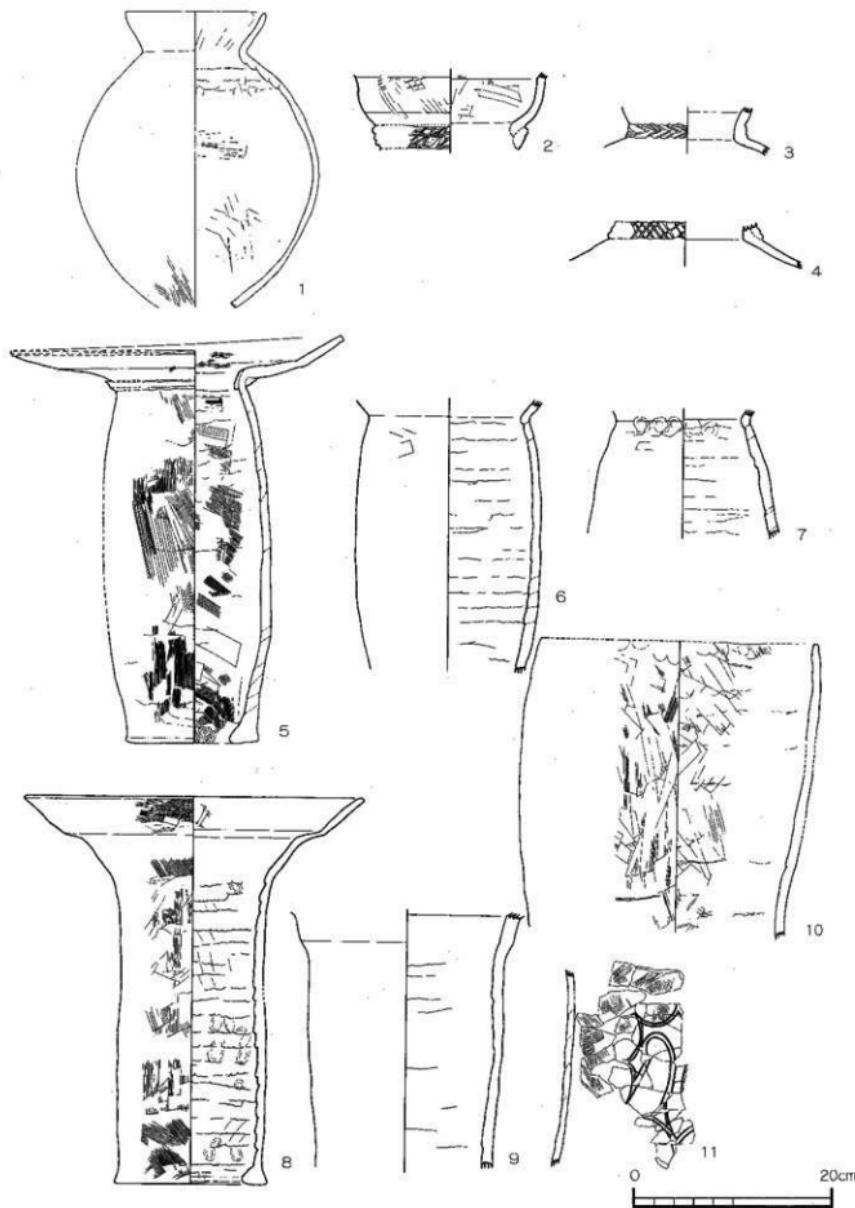
##### C種 円筒形の体部を持ち、体部に一条の突帯を有するもの(12~16)

埴輪は胎土が土師質で、微小の礫を含むものが殆どで、輪積痕が残るものも少なくない。これらの埴輪は焼成前底部穿孔で、底部の造りにもバリエーションが見られ、端部を肥厚させるものが多く、体部からそのまま内面に肥厚するもの(24~26)、L字(27~29)、T字(29~30)になるものがある。体部には透し孔が見られず、また、A・B種にはタガ状突帯が見られない。C種は、B種に比べ小ぶりなものが多く、胎土の状況から複合口縁になるもの(17~22)、端部でL字状に開くもの(23)が考えられる。また、口縁部資料の18~22は同一個体で、11も出土地点が近接していることと胎土の状態から同一のものと考えられ、体部外側と口縁部内面に線刻を刻む。A種がタガ状突帯、透し孔を有していないという特徴から、異形の壺形埴輪で、B種は口縁形、C種は口縁部の形態、タガ状突帯を有しているという特徴から、異形の円筒埴輪であると考えている。

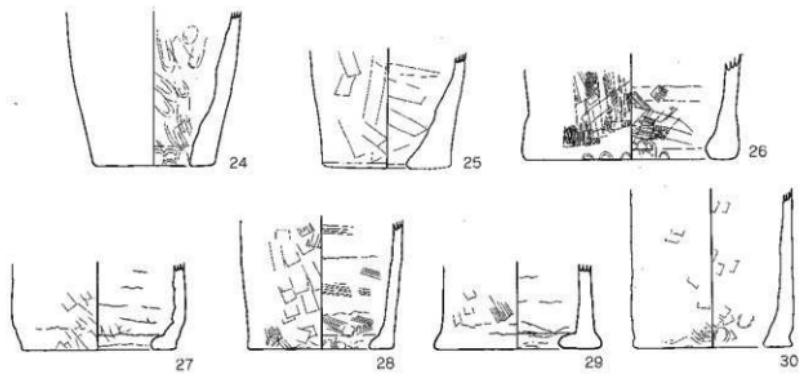
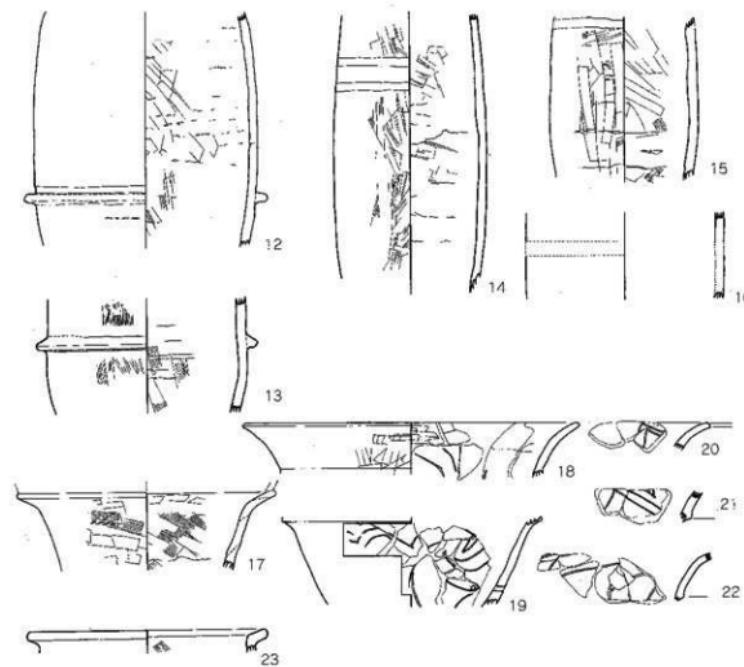
2の複合口縁壺は口縁部屈曲が不明瞭になる最終期の特徴を呈しており、今塙屋・松永編年の3期に相当している(今塙屋・松永2002)。

日向地方では前方後円墳集成編年5期(日向1期)になり、西都原古墳群の女狭穂塚古墳で円筒埴輪の採用を開始している。それ以前の前方後円墳では壺形埴輪(壺形土器)のみの採用で(有馬2000)、生目5号墳の資料は集成5期以前の資料と考えられる。5期以前の調査例である西都原13号墳(柄鏡形)では生目5号で採用される器種構成、個々の特徴など類似点が見られない。これらのことから、生目5号は柄鏡形類型以後から女狭穂塚古墳以前の構築が想定され、B種、C種の埴輪は本格的な円筒埴輪採用前夜の資料として、前方後円墳編年集成の4期から5期の初期段階に相当するものと考えられる。

【参考文献】15頁に掲載。



第5図 5号墳出土遺物実測図①(1/5)



0 20cm

第6図 5号墳出土遺物実測図②(1/5)



図版2 5号墳（上空より）



図版3 5 Ib前方部側面（北東より）



図版4 5 Ib（南東より）



図版5 後円部東側（前方部より）



図版6 後円部西側（前方部より）



図版7 前方部西側（後円部より）



図版8 前方部西側（北西より）



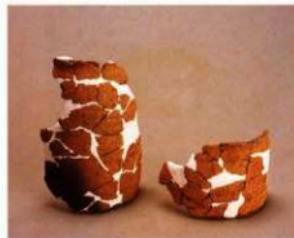
図版9 前方部西側周溝（北西より）



図版10 前方部平坦面遺物出土状況



図版11 後円部斜面遺物出土状況



図版12 6・7



図版13 8・9



図版14 11



図版15 18・19



図版16 24~29

## 第三章 7号墳の調査

### 1. これまでの調査の状況

3号墳前方部南側、台地縁辺部に位置する前方後円墳である。古墳は西から東へ下る傾斜地に立地し、主軸を東西方向に持つ。古墳の後円部、北側、東側周溝を掘割状に造られている道によって大きく削られている。墳丘両側面には、幅3~15m程度の周溝が巡り、現況では前方部前面側は不明となっている。また、後円部南側周溝内には島状の隆起が見られる。調査前は周辺に雜木が繁茂していたが、調査に伴い、墳丘上、周溝内の樹木はすべて伐採した。

#### 【調査前墳丘規模】

墳 長	46 m	後円部 径	24 m
後円部 高	3.9 m	前方部 幅	24 m
前方部 高	4.4 m	前方部 長	22 m
くびれ部 幅			16 m

#### 【調査箇所】

前方部前面墳丘(7A)

後円部北側墳丘から周溝(7B)

くびれ部北側墳丘から周溝(7C)

#### 【調査の結果】

前方部、後円部共に二段築成である。後円部は25.0m付近でテラスが巡る。葺石はテラス付近に転落石が見られることから葺いていたとは考えられるが、残存していなかった。下段は斜面中位以下は削平されており、墳端の検出もできなかった。

前方部はくびれ部付近では25.2mの位置でテラスが巡るが、前面では確認できなかった。葺石は上段においてのみ残存するが状態は悪い。下段は後円部と同様に斜面中位以下の削平が著しく、墳端の検出はできなかった。

周溝の立上りを確認できたのは7Cで、周溝は墳丘側からは緩やかに下り、外側立上り付近が最深部になり、高さ1.5mで著しく立上る。周溝の深さは推定墳端から約50cmを測る。

7Bでは周溝最深部の底面から土師器の高杯、TK23段階併行の須恵器の甕、坏身等の破片が集中して出土している。



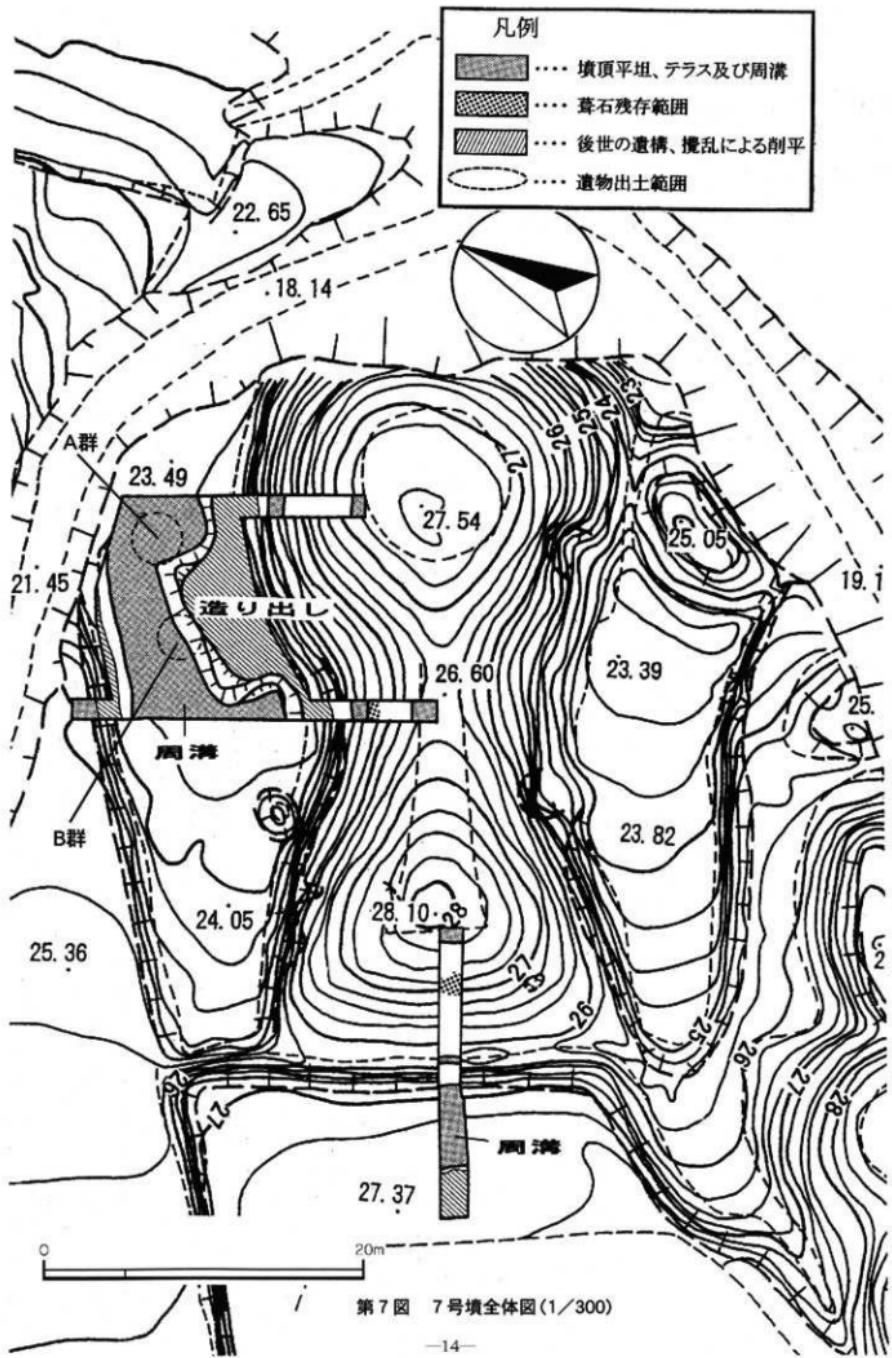
図版17 7号墳（北西より）

### 2. 平成13年度の調査結果

今回の調査は2箇所で調査区を設定した。

#### 7 I

7Bと7C間の周溝部分の調査である。その結果、くびれ部から後円部にかけて造り出しが確認された。地山整形で墳丘端周囲のテラスから派生して平坦面をもつものと考えられ、周溝に大きく突き出して構築されている。長さ12.0m、幅3.3m、基底部高54cmを測るが、平坦面部分は削平されている。造り出し周囲の周溝内からは、2箇所で集中して多数の遺物が出土している。それぞれで出土状況に違いが見られ、A群では遺物が周溝底面にほぼフラットに出土したのに対し、B群は底面から20~30cm浮いて、造り出しから周溝に向かって下るような状態で出土していた。



第7図 7号墳全体図 (1/300)

## 7 A 拡張

平成 11 年度に調査を行った前方部前面の 7A をさらに外側に拡張した。調査の結果、平成 11 年度では確認できなかった墳端とその外側で周溝が検出された。また、墳端と周溝間には幅 0.4m のテラスも確認できた。周溝は深さ 52 cm、幅 6.8m で最深部は中央部付近にあり、周溝外側は現状で 95 cm 立上る。周堤の有無は確認できなかった。周溝内からは葺石を構成していたと考えられる円礫が多数出土している。

### 出土遺物

7 号墳後円部北側造り出しの周囲の周溝内からは 2 個所で集中して遺物が出土した。A 群では多種の遺物が出土しており、土師器の甕(31)、壺(31~34)、塊(35~37)、高坏(38~50)、須恵器の坏蓋(51~56)、坏身(57~63)、高坏(64~65)、翫(66~68)、把手付鉢(69)、大甕(70)、脚台付壺(71)、筒形器台(73)、垂玉、円玉、石製紡錘車が出土している。B 群では須恵器の脚台付鉢(82)が 1 点と土師器の高坏(74~81)が出土している。

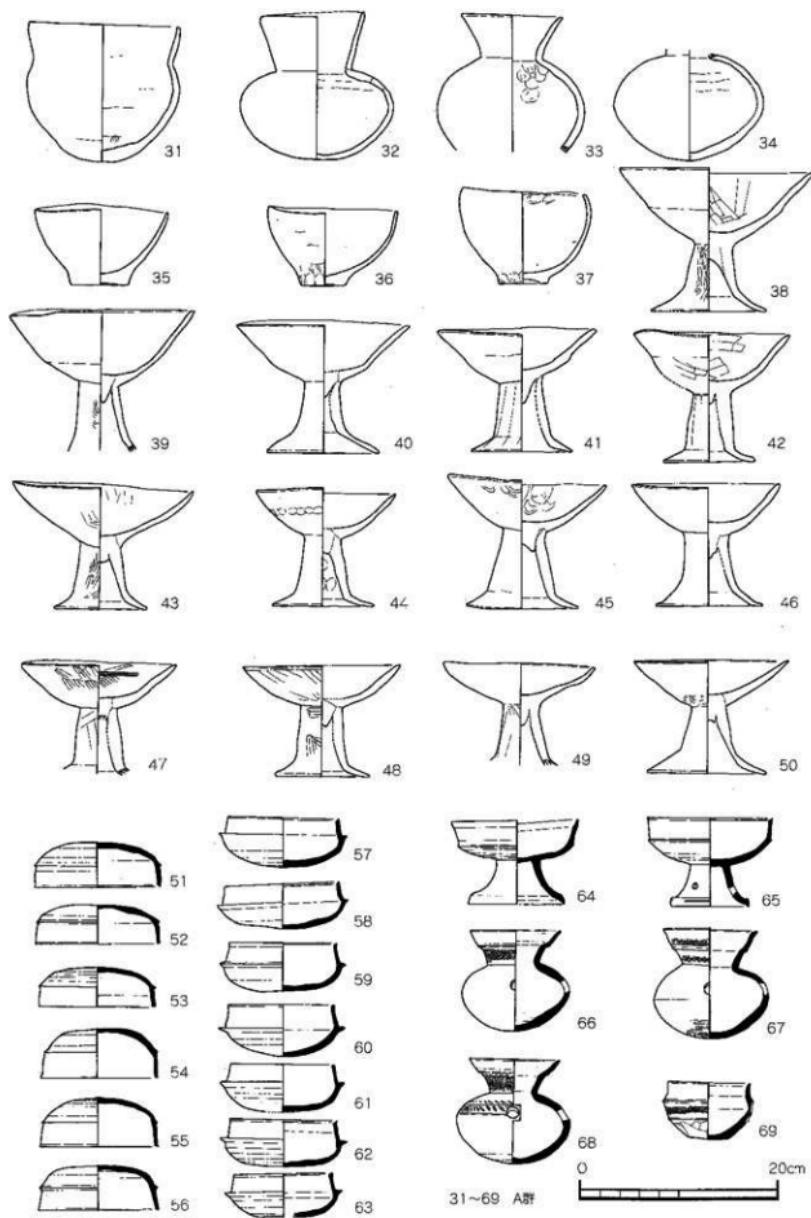
土師器 甕は小型で丸底を呈する。壺は扁球の胴部で丸底を呈する。塊は底部が上底を呈し、内湾し口縁部が立つもの(35・36)、口縁端部付近まで内湾するもの(37)がある。高坏は脚柱部が僅かにエンタシス状を残し、裾部間の屈曲は不明瞭である。坏部が僅かに屈曲を残し、外反するもの(38~42)、内湾しながら開くもの(43~50)、屈曲し外反するものがある(74~79)。

須恵器 坏身、坏蓋は器形、法量、焼成の状態が様々である。高坏は無蓋高坏で、坏蓋を反転させたような坏部で、脚部に 3 個の透しを有し、裾端部が T 字に肥厚するもの(65)、坏部の立上りが外反し、透しをもたないもの(64)がある。翫は丸味を帯びる胴部を有し、頸部以上で波状文がみられ、底部付近でタタキ目を残すものもある。把手付鉢は小型で受部付近に把手の跡が残る。脚台付壺は有蓋で脚部に 2 段の透しを持ち、上段に縦長長方形の透しを 6 個、下段に三角形の透しを 6 個施す。72 は脚台付壺の蓋である。筒形器台は高さ 58.4 cm を測り、表面に土製品等の表飾は見られない。また、一般的にみられる柱状部分と裾部間のテラス状の段が無く、柱状部から裾部にかけてそのまま開く。透しは合計で 9 段施され、最上段では涙状の透しを 4 個、柱状部分の 4 段では縦長の長方形の透しを各段に 5 個、裾部の 4 段では三角形の透しを各段に 5 個施す。脚台付鉢は脚部で推定 2 段の長方形の透しを施し、上段は 5 個であったと推定される。また、口縁部近くに、板状の把手の痕跡が見られる。

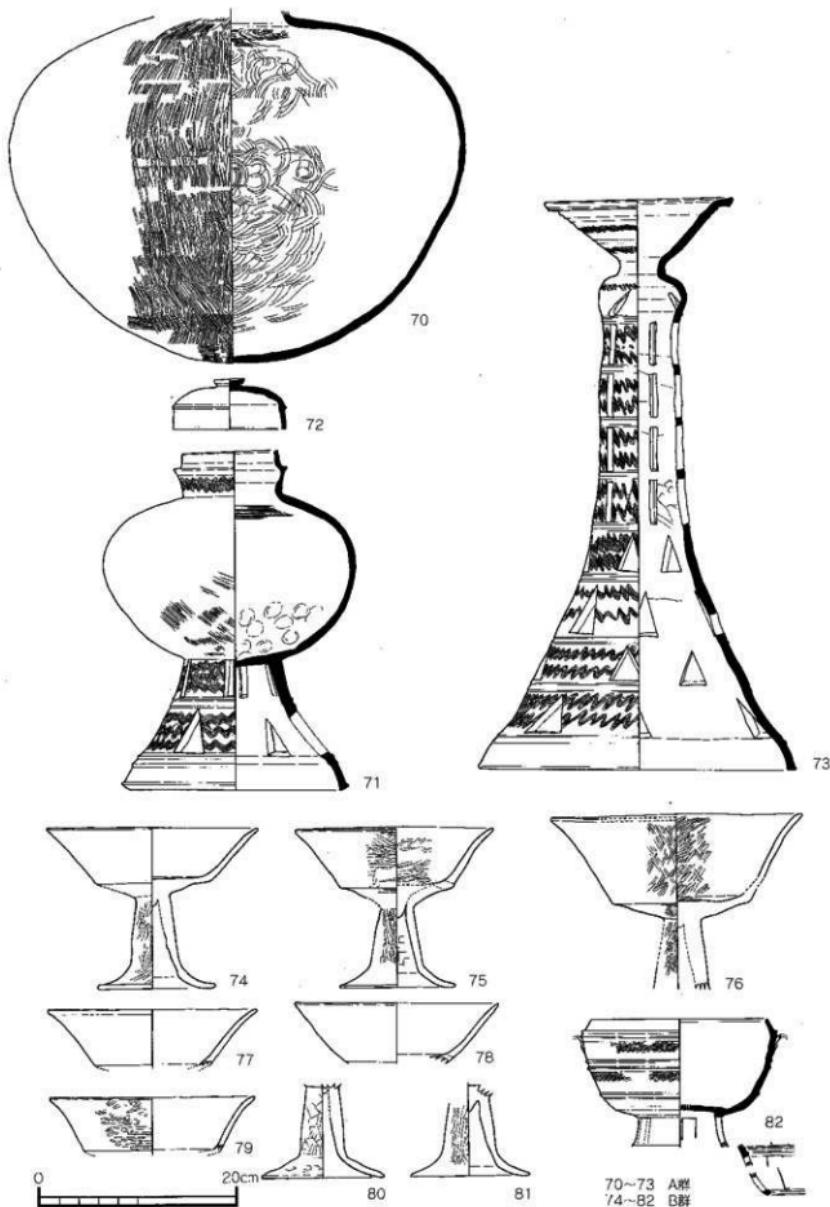
これらの遺物はその出土位置から造り出し上の祭祀行為に使用された一群と想定できるが、A 群と B 群での出土状況、器種構成の違い、また、土師器の高坏の明らかな器形の違いから、祭祀行為使用後の処理手段、土師器の高坏の使用目的に違いがあることが考えられ、A 群は投棄行為されたもの、B 群は祭祀行為以後も造り出し状に樹立していたものが、周溝内に流れ込んだものと想定している。これらの遺物は須恵器から TK23 段階併行期と考えられるが、胎土、焼成の状態等に違いがみられ、今後、産地同定の作業が必要であると考えられる。

### 【参考文献】

- 発表資料 有馬義人 2000 「宮崎県の埴輪—その導入と展闡」「九州の埴輪その変遷と地域性—壺形埴輪・円筒埴輪・形象埴輪・石製表飾」第 3 回九州前方後円墳研究会
- 発表資料 今塙順行・2002 「山向における古墳時代中～後期の土師器—宮崎平野を中心にして—」『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』第 5 回九州前方後円墳研究会  
松永幸寿
- 柳沢・男 1995 「日向の古墳時代前期主長墓系諸とその消長」『宮崎県史研究』9 宮崎県
- 川西宏幸 1978 「円筒埴輪論述」『考古学雑誌』64-2 日本考古学会
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店



第8図 7号出土遺物①



第9図 7号墳出土遺物②



図版18 7号墳（上空より）



図版19 前方部前面周溝



図版20 後円部造り出し（前方部より）



図版21 遺物出土状況（西より）



図版22 遺物出土状況（A群）①



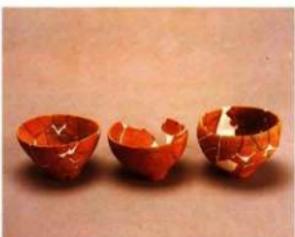
図版23 遺物出土状況（A群）②



図版24 遺物出土状況（B群）



図版25 31~34



図版26 35~37



図版27 38~42



図版28 43~50



図版29 51~56



図版30 57~63



図版31 64~69



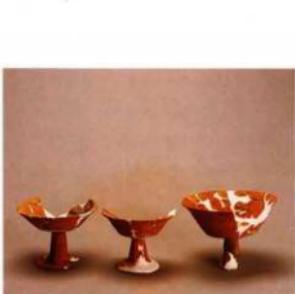
図版32 70



図版33 71



図版34 73



図版35 74~76



図版36 82

## 第IV章 8号墳の調査

### 1. 古墳の概要

7号墳の南側に位置する古墳である。本古墳は円墳として指定されているが、現況は、縦長の亜な形をしている。8号墳側辺には市道「城の下線」が通っており、調査以前から道路建設の際の廃土が指定を受けた可能性も考えられた。墳丘上には現在カラカシ、サカキ、マテバシイなどが見られる。

### 2. 平成13年度の調査結果

墳丘には4箇所で島状の隆起が見られ、それぞれに4本のトレンチを設定し、北から8A、8B、8C、8Dと名付けた。また、8A、8Bは北側に控える7号墳の周堤確認も並びに調査した。

本古墳の調査では墳丘であるか否かに関わらず、人為的な盛土が検出されることが予想されたため、古墳に伴う盛土であるかは、10～13世紀に降灰した霧島高原スコリアとの先後関係を判断材料とすることとした。



図版37 8号墳（西より）

#### 8 A

調査の結果、霧島高原スコリア上位で盛土が確認された。盛土は最大で245cm堆積しており、シラス土を主とする土壤によって構成されている。また、並びにおこなった7号墳周堤と判断できる隆起等は確認されなかった。

#### 8 B

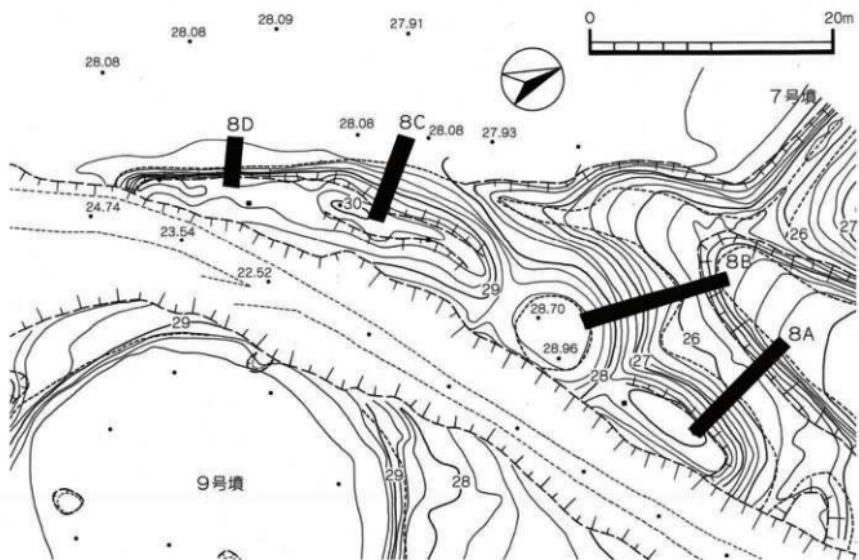
調査の結果、霧島高原スコリア下位で盛土が確認された。結果、墳丘の可能性が想定される。墳丘は2段築成で、高さ2.8mの円墳と推定される。また、墳頂から1.6m下の地点では幅0.7mの上下段間のテラスが確認された。墳丘は墳端から0.8mが地山削り出しで、それ以上が盛土によって構成されている。遺物は墳頂部付近から須恵器甕の胸部分が出土している。また、並びにおこなった7号墳周堤と判断できる隆起等は確認されなかった。

#### 8 C

調査の結果、霧島高原スコリア上位で盛土が確認された。盛土は最大で210cm堆積しており、シラス土を主とする土壤によって構成されている。また、本調査区では弥生時代後期の竪穴住居が検出された。平面プラン、サイズについては不明であるが、検出面からの深さは10cmを測る。また、住居内からは直径20cm、深さ35cmの柱穴が検出されている。遺物はほぼ床面から、甕、複合口縁甕、長頸甕、広口甕が比較的まとまって出土している。

#### 8 D

当調査区周辺は墳丘が要壁状に立っている。調査の結果、霧島高原スコリア下位で盛土が確認された。盛土はアカホヤ火山灰土上位の黒色土の上に75cm堆積しており、墳丘の可能性が想定できる。遺物は出土していない。



第10図 8号墳調査区図 (1/400)



図版38 8A (北より)



図版39 8B (北より)



図版40 8C (西より)



図版41 8D (西より)

# 報告書抄録

ふりがな	しせき いきめこふんぐん						
書名	史跡 生目古墳群						
副書名	保存整備事業 発掘調査概要報告書IV						
巻次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第54集						
編著者名	稻岡 洋道						
編集機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎県宮崎市橘通東1丁目14番20号 TEL(0985)25-2111						
発行年月日	2003年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 避暑	北緯 °'\"	東經 °'\"	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
いきめこふんぐん 生日古墳群	みやざきけんみやざきし 宮崎県宮崎市 おおあざと大字跡江	45201	31°56'54" 付	131°23'15" 近	2001.9.10 → 2002.2.28	745	保存整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
生日古墳群	古墳群	古墳時代	5号墳—葺石、基壇、周溝	壺形土器、埴輪			
			7号墳—造り出し、周溝(馬蹄形)	土師器—小型壺、壺、鉢、高杯 須恵器—壺身、壺蓋、高杯、ハソウ、把手付 鉢、大甕、脚台付壺、筒形器台 石製品—重玉、白玉、石製紡錘車		造り出し周囲で 多数の遺物出土	
			8号墳—墳丘2基	須恵器—甕	1基は2段築成の円墳		

# 史跡 生目古墳群

保存整備事業 発掘調査概要報告書IV

2003年3月

発行 宮崎市教育委員会